

武井敦史『クリシュナムルティ・スクールの民族誌的研究』

——多賀出版、2003年——

富山大学 黒羽 正見

はじめに

私は仕事から学校を訪問する機会が多い。今年度（2004年）も小・中・高の学校の校内研修や公開研究発表会等で132校を訪問する機会に恵まれた。しかし、そこでの学校教育の有り様といえば、子どもたちは教師の理論の枠組みの中で、教師の期待すべき解答を模索しながら、ひたすら正解を求めることに奔走している姿を浮き彫りにしていた。また、教職員は教職員で研究課題に関する共通理解がなされないまま授業を展開しているように思われた。教育実践家だからといって、ただ熱心に実践に取り組みばよいとばかりはいえない。研究と実践を対立・二元的なものとしてとらえる立場に立ってはいは、最終的に「特別に研究などしなくても、実践さえしっかりやっていたら大丈夫」という結果を招くのは必至である。

このような学校教育の現状を危惧すると、教育研究と実践の一元化が、教育の事実として学校現場に根を張っていくという形で現れるべきだと考える。それには、教育研究が「学校現場に開かれる」ことが重要である。「開かれる」とは教育の事実と密着する、学校現場に根ざす、学校現場を基盤とする、理論と一つになる、等を意味している。

したがって、私は教育研究が現場に根ざし、教育の事実と密着しながら、理論と一つになっている実践的研究を第一義に考えたい。突き詰めるならば、学校現場に役立ち、最終的に学校の改善（変革）にも貢献し得る研究である。

1. 本書の章構成と概要

本書は、現に兵庫教育大学学校教育学部の教官である著者がインドでの五年間80日余りに及ぶフィールドワークを通して書き上げたことが、重要な特色である。具体的には、著者が一人の人間として、現代インドの文化的両義性の中、「その世界で生活し、自明性の中に埋め込まれている人々と生活を共にし、参与者としての自分と観察者としての自分という二つの人格をうまく制御し、自分の観察データとその解釈に絶えず批判的検討を加えていく」という懐疑的な脱構築を生成原理としながら、教育や既成の観念を再構築していく過程を読み解いていった点にある。とくに、各章を貫く「今日の社会が自明視する教育や既成の観念へ問い直しの鋭いまなざし」は、読後感にとっても新鮮でさわやかさがある。

この研究の目的は、インド農村におけるクリシュナムルティ・スクールの一校を事例として、「地域の社会・文化構造と教育への要求」、「教育観・教育理念とその形成過程」、「学校における生

活と教育の実態」の3視点からその内実を明らかにし、そこにおける知の特質とその存立構造を解明することにより、インドにおける近代性と学校の関係を問い直す点にある。研究の全体構想は、序論について5章構成からなる。主な内容構成は、以下の通りである。

- 序章 本研究の目的・方法・構成
- 第1章 J.クリシュナムルティとクリシュナムルティ・スクール
 - 第1節 J.クリシュナムルティへの研究関心
 - 第2節 J.クリシュナムルティによる学校への影響構造
 - 第3節 J.クリシュナムルティ・スクールについて
- 第2章 調査地域の社会構造と教育状況
 - 第1節 アンドラプラデーシュ州の初等教育の概況と州政策
 - 第2節 テットゥの社会構造
 - 第3節 村の経済と産業
 - 第4節 村の生活と宗教
 - 第5節 テットゥにおける児童の仕事の態様と学校教育
- 第3章 SVNの教育観
 - 第1節 SVNにおける教育観の形成と検討方法
 - 第2節 SVNにおける教育観の構造
 - 第3節 教育観の形成過程とライフヒストリー
- 第4章 SVNにおける生活と教育の実態
 - 第1節 SVNの設立過程
 - 第2節 学校の成員と経済運営
 - 第3節 SVNの一日
 - 第4節 教育活動実態
 - 第5節 規則と罰則のシステム
- 第5章 SVNにおける価値の態様と知の構造
 - 第1節 本研究における「価値」
 - 第2節 人間関係における価値の態様
 - 第3節 自然・環境との相互行為における価値の態様
 - 第4節 時間構造と動機づけにおける価値の態様
 - 第5節 SVNにおける知の構造とその成立背景
- 終章 本研究の展望と今後の課題

まず第1章では、本研究の対象となるクリシュナムルティ・スクールについてその概要を説明し、その特質を解明するのに有効なアプローチを明らかにした。その上で、先行研究の吟味・検討を通して、「なぜ、クリシュナムルティ・スクールを対象とするのか」について明らかにしている。調

査対象のサダナ・ヴィディヤ・ニラヤム（以後、「SVN」という）という小さなクリシュナムルティ・スクールは、インド南東部アンドラプラデーシュ州の人口約900人の農村テットゥに立地している。著者によれば、教師の日々の実践や教育観はそれ自体で自立したシステムではないという。そして、それらを全体論的な視点の下で社会的・文化的な文脈の中で捉え、その全体を今日の社会や学校と対照させることで、学校の知の形成における非合理的な側面を扱う際の研究者の基本的スタンスを問い質そうとしている。

第2章では、調査対象とする地域の文化・社会の構造、なかでも子どもを取り巻く環境に焦点を当てて検討し、学校を取り巻く社会状況を明らかにしている。とくに、「調査地の地域的特色や州の初等教育状況および制度構造」、「調査村の特徴や利用可能な施設設備の普及状況や社会組織構造」、「経済階層毎の村人の生産・消費の態様や近年の産業構造や生活の変化」、「生活習慣としての衣食住や娯楽および村を支配しているカースト制や宗教の機能」、「児童の仕事の態様と学校教育の普及状況」の五つの視点から学校・子どもを取り巻く環境を素描している。

第3章では、調査対象校であるSVNにおける教育観の内実と学校設立者のライフヒストリー分析による教育観が形成される背景を社会的背景との関連で検討している。

第4章では、学校生活および教育活動と経営の実態を主に観察データを基礎資料として明らかにしている。

第5章では、第2章から第4章までで解明してきた民族誌をもとに、SVNにおける価値の態様を検討し、これを基にSVNにおける知の特質を概念化している。

2. 本書が「学校現場に開かれる」ことの意味

インドにおける近代性と学校の間を問う研究を、インド農村におけるクリシュナムルティ・スクールという一つの私立学校の事例を通して探求したことが、どのような意味を持ち得るのか、第1章から5章までの研究成果を踏まえて述べることにする。

著者が近年の再生産論から学校論にいたる閉塞状況の打開策として、モダニティなるものをその外部との関連から問い直すために、インド農村部にある一つの私立学校に焦点を当てて、そこにおける知の特質とその存立構造を生活を共有する共同体の行為として描出している点である。これは、想像するに難くない異国でのフィールドワークの困難さが絶えずつきまとう中で、その世界での内的論理を既にその世界で生活し、自明性の中に埋め込まれている人々との生活を共にしながら、その人々の視点に立ち、焦点づけ、組み立てていく作業を根気強く遂行したことに価値があると思う。

今日の世論は、学校の病的現象や学力低下問題などに対して、情動的に反応する傾向が強い。マスコミが学校や子どもの異常や学力低下を扇動的に取り上げ、類似問題が矢継ぎ早に報道すると、あたかもすべての学校が同様に深刻な状況に陥っているかの如く受け取られ、過度の一般化の弊害を生じる傾向が多々見受けられる。このような学校教育総体に対する批判論の下で、実際に日々学

校を改善することに腐心している「心ある教師」の現実の姿は片隅に追いやられ、ただ無力な存在であるに過ぎない。

しかし、第3章の教育観のライフヒストリー分析や第4章の民族誌的手法によるSVNの教育活動の実態が物語っているように、個々の学校は既にそこに生活している教師や子どもや地域の人々によって主観的・意味的に構成された世界であり、そのような意味構成の過程が十分に学校組織成員の立場から解明されない限り、学校教育の内実を本当の意味で説明したことにはつながらないのである。その点で、著者がモダニティ、とりわけ近代的な知の構造に対する問いの方法の転換を図るべく、インド農村の一つの私立学校に限定して、5年間80日余りに及ぶフィールドワークを通しながら、この学校の関連のある教育事象を丁寧に観察し、記述・説明するという作業を入念に実行したことは、教育の理論が根を据えている「リアリティ」を生み出す生活世界をとらえている。とりわけ、SVNで現実の教育事象として生起する非合理的な側面にも注意を払い、学校の現実の姿をそこで経営に関与している教師や学習主体の児童・生徒の価値に即して内在的に理解する作業を実行している。このように著者が、クリシュナムルティ・スクールの教育的な営みの現実に関わりなく肉迫する努力をしたことで、学校の日常世界の常識や理論（とりわけ、近代社会の文脈で生まれ成長した学校制度の機能など）に対して、「それは本当なのか」という「懐疑的な態度をもつ勇気」の必要性を提起した点は意義がある。すなわち、自分という存在との関係のない理論を構築せず、現実からの耐えざるフィードバックによって理論を構築しようとした点である。従来の学校研究は、あらゆる学校組織に適用できる普遍理論を追求する規範論的性格を帯びている傾向が依然と強いように思われる。しかし、著者は「学校の教育事象はそれぞれユニークである」という基本認識を前提としながら、その学校固有の知の構造とその成立過程を探求している。そして、学校がそれぞれユニークな存在としての「全体性」(wholeness)を備え、児童・生徒が教育という目的に従属せず、子どもの生きる過程そのものであり、それは学校を取り巻く世界の象徴性とつながっている状況を明らかにした。

このような点から、著者はわが国の学校教育の現状を鋭く読み解き、今後は学校研究が近代科学のパラダイムの呪縛に縛られることなく、学校の差異性に着目し、学校現実の「ありのままの全体状況」を「洞察」という手法によって具体的に解明していくことの重要性を立証している。

3. 一人の教育実践家として本書から示唆を受けたこと

今、インド農村のクリシュナムルティ・スクールという視角から、今日の学校教育を見渡してみると、近代の学校教育がその価値によって人間を基本的な生の様式から乖離させるという営みを引き受けることで、大きな問題を抱え込む結果となってしまったように思われる。すなわち、意識的ではないにせよ、学校教育は身体や言葉を意識の客体として対象化していくことで子どもから身体性を消失させ、抽象的で物象化された主体を自己として成立させていくような営みを中心になっていると感じざるを得ない。そうした状況の中で教師と生徒の人間関係も硬直化・希薄化して、「信

頼」と「親愛」を基盤する教育的関係を構築し難い状況が生み出されている。著者は、SVNにおける教育を「教師と子どもの相互行為」として彼ら自身のパースペクティブに沿って内側からみていくことによって、学校が近代教育によって提示される理念に沿った教育的な営みによってではなく、日々の相互行為の中で互いの解釈と意味の共有によって存在していることを描き出している。具体的には、「SVNの学習は個別学習を基本とし、そこでは『教える過程』と『教えられる過程』が同時に存在し、生徒個人に帰属する能力概念で生徒を測定するよりも、他者とのつながりの中で学習結果がとらえられる傾向がみられること。また規則・賞罰システムも当事者間の共通理解に基礎を置き、賞罰作用も特定行為に対する評価行為に限定されていること。さらにインド農村の伝統社会と近代社会との文化的な両義性の中で問いを重ねることで、設立者の教育観が次第に形成されつつ、『融和的な知』を特色とするSVNが形づくられていったこと。」などである。それらは、教育的な営みによる教師や学校の価値を内面化することで形成されたものではなく、インド農村の学校という場に存在していた可能性が有機的に関連づけられることによって生まれたものである。このような牧歌的なSVNの教育的な営みは、今日の権力の渦巻く、しかも混沌する複合的なわが国の教育状況には、一見すると馴染が薄いように思われる。しかし、学校教育の抱える今日の問題への対応にこそ、著者がクリシュナムルティ・スクールの教育的な営みを描出するために採った「民族誌的スタンスに立って実践すること」の核心があると思う。

おわりに

今日、個々の学校が大衆社会的状況の波に押し流されて、学校としての本務や価値を見失い、八方塞がりの状態に陥ってる点は否めない。学校が多忙化や管理によって教室から自由な雰囲気奪われ、子どもも教師も活気を失い、人間的な温かみがなくなっているという論調は枚挙に暇がない。しかし、クリシュナムルティ・スクールの民族誌の中で語られる教育的な営みに謙虚に向き合うと、今日の学校教育が閉塞状況に陥っている要因を窺い知ることができる。すなわち、現実には単純に教師が管理や多忙化に縛られているのではなく、そのような言説に覆われた社会的状況の中で、学校経営の組織とその実態が学校の自律性の進展を妨げていることに、看過し難い原因があると思う。

今、このような閉塞状況を打開するためには、著者のナラティブとしての民族誌が鋭く指摘しているように、本質を見抜く冷静な眼をもつことである。つまり、教師自身が学校教育をめぐる言説に覆われた自身や児童・生徒の行為解釈から離れて、冷静にその営みをみつめ、内省することの重要性である。

以上、今回の書評は「学校現場に開かれる」という私の問題関心からのものである。その点からいえば、偏った見方であるとの誹りは免れないかもしれない。しかし、本書が知らず知らずの内に、私の身に纏わりついてきた「学校教育の既成観念」を打ち砕いてくれた新鮮さは、紛れもない事実である。